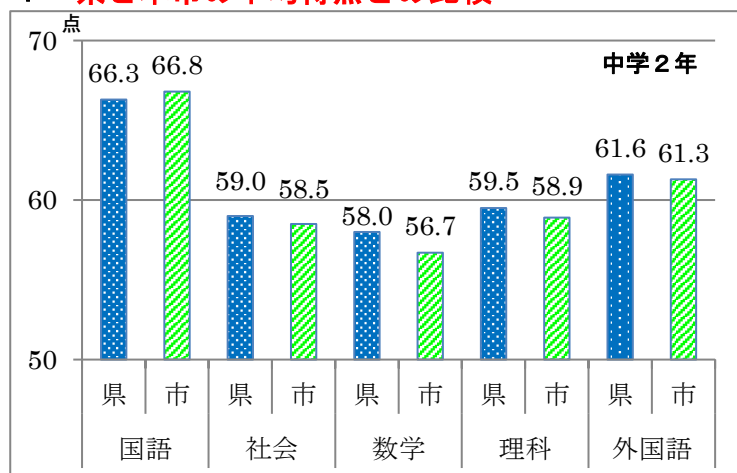


令和5年度千葉市学力状況調査結果概要（中学校版）

1 県と本市の平均得点との比較



【下降傾向、下げ止まらず】

中学校2年では、国語0.5点と、市平均得点が県平均得点を上回ったが、社会0.5点、数学1.3点、理科0.6点、英語0.3点と、全教科で市平均得点が県平均得点を下回っている。令和4年度と比較すると2点前後も下がってしまっている。

2 各教科の改善策

【国語】 表現の特徴や表現の仕方およびその効果を捉えながら読む活動の充実

- 相手を説得する文章において、「事実」と「意見」を分け、段落の文頭を問う問題では、無回答率は15%と高い。授業における作文学習では、「事実」と「意見」はどのようにつながられているのか、前後の構成はどのようなになっているかを授業の中で学習できていないことが考えられるため、日常生活にある文章をテキストにし、書きぶりや構成を学習する機会を設けるとよい。
- 短歌の内容について、読者は鑑賞文を読むことで、その短歌の表現の巧みさやよさ、魅力を捉えることができる。韻文に表されている語句がどのような言葉で表現されているのか、また韻文には表されていない世界や背景がどのように説明されているのかを読むことで、その味わい方について学び、韻文を楽しむことができると考えられる。

【社会】 資料を活用し、必要な情報を読み取り、思考力・判断力・表現力等の育成を図る

- 略年表から、日本史と世界史の大きな流れをつかむことができていない。歴史的事象を基にその前後関係や背景を把握するための知識が習得されていない。単元を貫く問い「なぜ日本では他のアジア諸国に先駆けて近代化が進んだのか」等を設定し、その時代の特徴を歴史的背景や世界の出来事と関連付けて、追究できるようにする。
- 歴史学習に関わる様々な資料を意図的に配置し、社会的な見方や考え方を働かせる学習過程を行っていない。学習過程において、我が国の近代と現代の文化や人々の生活、社会の様子等を映像や写真資料を用いて比較検討することで、知識を習得させるようにする。その上で、我が国の現在の社会や文化について考えることができるような問いを設定し、生徒の思考を深める。

【数学】 生徒が進んで複数の解き方を考え、表現できるような授業改善

- 第2学年では、「変化の割合についての考察を通して、 x の係数 a は、 x の値が1だけ増加したとき、対応する y の値がどれだけ増加するかを表していること、さらに、 x の値の増加に対しての y の値の増加分も、 a の値を基にして求められることなどを理解できるようにする」ことが求められている。変化の割合を指導する際には、形式的に変化の割合を計算して求めることに偏らないようにするとともに、変化の割合を事象の考察やその表現に適切に用いることができるようにすることが大切である。
- 第2学年では、「同様に確からしいことに着目し、確率を求める方法を考察するとともに、確率を用いて不確定な事象を捉え考察し表現することができるようにする」ことが求められている。指導に当たっては、実際に多数回の試行によって得られた確率と場合の数を基にして求めた確率とを関連付けて、求めた確率を理解できるようにすることが大切である。また、樹形図や二次元の表などの数学的な表現を用いて説明し伝え合うことを通して、場合の数を基にして得られる確率の求め方を考察し表現できるようにすることも大切である。

【理科】 理科の見方・考え方を働かせて考察したり、多面的に考えたりする活動の充実

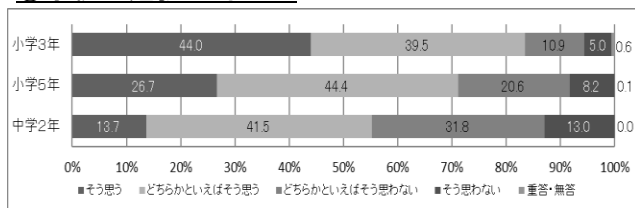
- 観察・実験を行う上での留意点について、誤操作等による危険性・問題点を多面的に考えさせる時間を確保する。その後、起こり得る事例を具体的に確認することで理解を深めるとともに、安全に正しく観察・実験を行おうとする態度を育てる。
- 観察・実験について結果をもとに理科の見方・考え方を働かせて考察し、科学的な根拠に基づいて議論するなどの時間を十分に確保し、対話的な学びにつなげることが必要である。

【英語】 丁寧かつ生徒の表現力が広がるような指導の工夫

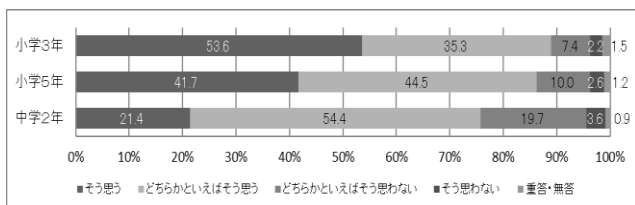
- er, -est となるもの、more, most がつくものなどの文について、意味ある文脈の中で使い、使っては学ぶといった、理解や練習と実際の使用のサイクルを繰り返す機会を増やし、それぞれの意味の違いやともに使われる表現の違いを確認する。
- 「読むこと」の指導では、英文和訳に終始せず、パラグラフごとに要点を捉えさせるなど、文と文との関係に着目して内容を理解していくように促す。この問題では、前後の文脈との整合性が取れるかを見極めることが必要であり、答え方と語句の意味が定着していれば正答にたどり着くことができる。Aさんの心情を発問したり役割演技をさせたりして、場面のイメージを捉えさせながら、適切な返答の理解を促す必要がある。

3 学習に対する意識（勉強が好き・わかる）

①学校の勉強が好きだ



②学校の勉強がよくわかる



教員による「わかる授業」の実施を

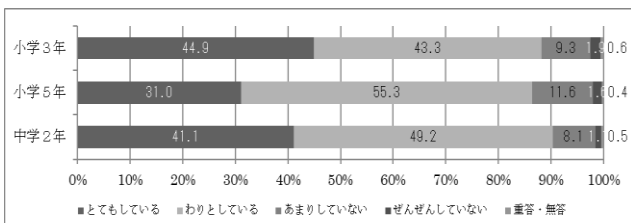
自立した学習者として主体性を育てていくために、事実に関する知識を個別に獲得させることに終始するのではなく、教科等横断的な学びを通して児童生徒が複数の知識を関連付け、構造的な知識の獲得とさらに学びを深めていこうとする姿を目指していきたい。

そのためには児童生徒が「理解する・わかる」ために教師が主導となる授業も生かしつつ、児童生徒が「知りたい・わかりたい」と関心意欲や課題意識を高くもって、学習に臨めるような教師の授業への意識転換が求められる。

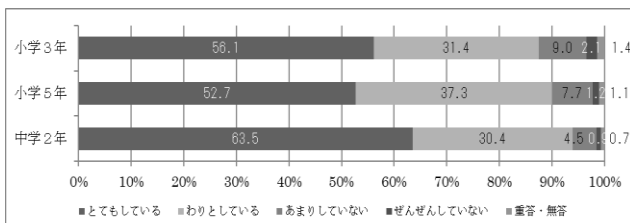
「わかる」には「分かる」「解る」「判る」三つの意味がある。

4 学校での生活に関する意識

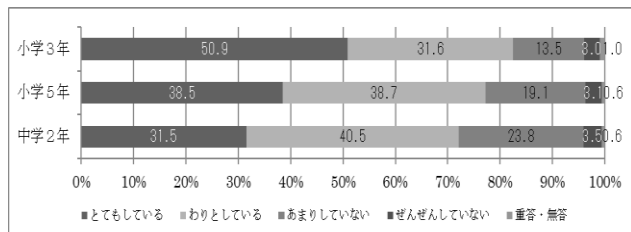
○清掃活動に熱心に取り組む



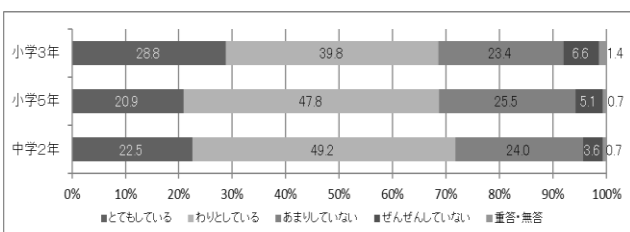
○係活動など責任をもってこなう



○いろいろなことに挑戦している



○がんばったことを、先生や友達からほめられる



「自主性」は発揮されているが、「主体性」の発揮に課題が見られる

「清掃活動」や「時間を守ること」のように、「決められた範囲の中で決まった行動を行うこと」については値が高く、多くの学校で自主性をもって生活を送る環境にあることが想像される。一方で、「挑戦する」のように、「決められた範囲ではない、もしくは行動の結果が見通せない状況」の中で行動する主体性については、それが発揮される環境にあるかどうか、検討が必要である。「できたこと」等の結果に対してだけでなく、「挑戦したこと」そのものへの態度やプロセスに対して「ほめる」等他者からの肯定的な反応が、児童生徒の挑戦する姿勢を支えることが考えられる。